

昔のくらしを考える いま、そこから学ぶこと

昭和のくらし博物館 館長
小泉和子

エアコンのない夏をどう過ごしたか

私は「昭和のくらし博物館」という私設博物館を運営している。昭和26年に第一次の住宅金融公庫の融資を受けて建てた私の一家が住んでいた家である。木造2階建て、延べ18坪の茅屋であるが、戦後の庶民住宅の資料として残しておく必要があると考えて公開している。家財道具も捨てずに残しているので昭和30年代ころの生活状況を展示してある。こ

のためテレビや新聞、雑誌などがよく取材に来るが、去年は大震災があったため、とくにエアコンや電気冷蔵庫が無かった当時の夏の過ごし方についての取材が多かった。

たしかに昔はエアコンや電気冷蔵庫はもちろん、氷冷蔵庫だってどこの家にもあるというものではなかった。せいぜい扇風機だが、それだって30年代の半ばからである。

じゃあ暑い夏をどう過ごしていた

かである。

まず建具をはずし、風通しを良くし、すだれや御簾を掛け、軒先には^{よしず}蓑簀を立てた。障子や^{みす}衝立には紙を張った部分を取り外して^{すど}簾戸に取り替えられるようになっているものもあった。室内には冷たい^{とうむしう}感触の^{すだれ}簾や網代を敷き、座布団も麻やパナマに変えた。寝るときには寝ごさを敷いたり、^{すだれ}簾枕や陶枕を使ったりした。

また勉強や仕事は涼しい朝のうちに^{ひなみず}にしてしまつて、日中の暑い時間は昼寝を^{ひなみず}すると、日向水をつくって行水をするなど、暑さを凌ぐためにいろいろと工夫したが、そもそも家の建て方が違っていたので今ほど炎熱地獄になることはなかった。木造で開口部が大きかったため風通しがよく、深い庇がついていたから、その下は広い影になり、暑い日差しが中に入ってこない。木造だから鉄筋コンクリートのように温石化することもない。地面も舗装してなかったから、熱を溜めることがない。陽が落ちれば放射熱はなくなり、夜露が降りれば地表は冷たくなる。

陽が落ちて地面が冷めてくる頃を見計らって、葉からしずくがしたたり落ちるほどたっぷりと打ち水をすれば、打ち水を通して涼しい風が吹いてくる。庭に面した縁側にちゃぶ台を出して、風鈴の音を聞きながら、蚊遣りの香りの中で家族揃って食べる夕食は、夏の楽しみの一つだった。

といってエアコンで冷房するよう



写真1 「昭和のくらし博物館」 外観

な絶対的な低温度になることはない。暑いときは暑い。だが暑いからこそ涼しさが身に染みたので、これが今では忘れられてしまった点である。

風の通り道になっている板の間などで昼寝をしていると身体の上を涼しい風がすうーっと通り抜けて行く、このころよさ。暑い外から帰ってきて、冷たい井戸水でぎぶぎぶと顔や足を洗うときのきもちよさ、早朝、家中の戸を開け放すと涼しい風がいっぱいに入ってくる、そのさわやかさ、いずれも「涼しいということのうれしさ」で、これも暑いからこそだったのである。

問題はここである。エアコンはたしかに涼しい。とくに暑いところから入ると、入った最初は涼しく感じてうれしいが、そのうちに何にも感じなくなってしまう。もちろんそれでも涼しくはあるから、文句を言うことはないのだが、それだけ人間が自然と離れてしまうことになる。便利で快適なら、あとはどうでもいいということかも知れないが、これは少々まずいのではないか。もちろんエネルギー問題ということもあるが、それはおいておくとして、エアコン漬けになっていると季節感が鈍化し、暑さ対策を工夫する力もなくなってしまうだろう。これは人間としては退化ではないか。

しかしこれはエアコンだけのことでなく、現在の暮らし方に共通しているのではないか。エアコンの場合は、室内温度を下げるといった、それまで不可能だったことが科学技術によって可能になったもので、もともと人手を使っていたわけではないが、それも含めて、現在の暮らし方の大きな特徴は、自分で骨を折らなくても、便利さ、快適さが手に入ることである。

家電の普及によって炊事も洗濯も掃除も機械がやってくれるようになったし、家事の外部化もすごい。冷凍食品やインスタント食品、レトルト食品など驚異的である。まな板や包丁がない家もあるというが、たしかに無くても困らないだろう。衣服も既製品がいくらでも買えるから自分で縫う必要はないし、安いので破れても躊躇わずに捨ててしまう。挙げて行けばきりがないが、おかげで暇ができて、レジャーは花盛り、女性の社会進出も進んだ。ハッピーになったはずである。

ところがそれに逆行するように人間がおかしくなっている。人との接触を嫌い、自分勝手になり、思いやりがなくなり、助け合いもしなくなった。その結果、家庭崩壊、学級崩壊が進み、いじめ、引きこもり、鬱病が増え、自殺が後を絶たない。



写真2 茶の間。ちゃぶ台にしつらえた食卓の様子を再現

昭和30年代の暮らし

昭和30年代を描いた『三丁目の夕日』という映画が大人気になった。最大の理由は貧しかったが人のつながりがあったこと、なにかあると近所中で心配し、助け合う。良いことがあればみんなで喜ぶ、今は失われてしまったこういうくらしの情景に人々は郷愁の涙を流したのである。

ところがこの映画が描いてないことがある。当時のみんながしていた我慢、気遣い、忍耐などである。製作者が当時を知らなかったからかも知れないが、みんながそうした努力をしていたからこそ、ああした人情



写真3 タライによる洗濯の様子。昭和の30年代頃まではどこの家でも普通に行っていた家事の記録映画「昭和の家事」から



写真4 伸子張。同「昭和の家事」から



写真5 布団の綿入れ。同「昭和の家事」から

あふれる世界は成り立っていたのである。

これは映画に出てきたことではないが、たとえば呼び出し電話である。当時はまだ各家にまで電話が引けてなかったから近所の電話のある家に頼んで置いて、電話がかかってくると呼び出して貰っていた。しかしこれはお互いにとってけっこうシンドイことだった。呼び出してもらう方はなるべく手短かに話を済ませるとか、たまには御菓子とか果物などを贈って気を遣った。呼び出す方も、いづどんなことで世話になるかわからないので、たとえ面倒だと思っても走っていったものである。

内風呂もなかったからみんな銭湯に行ったが、銭湯にもさまざまなマナーがあった。立ったままジャージャーとお湯をかけたりすると、すぐに叱声が飛んできたし、髪を洗うときなども泡がまわりに飛び散らないか気をつけ、飛べばすぐにあやまった。カランから遠いところの人には湯を汲んであげたり、近所のおばさんの背中を流したりした。

レストランもホテルも少なかったし、あっても一般に利用できるものではなかったから、親戚でも知人でも友人でも、子供の友達でも、誰でも来れば食事を出したり、泊めたりした。大事な客だったりすると料理ごしらえも大変だった。食器もそろえなくてはならないし、食事が終わった後は片付けである。蛇口からお湯が出るなんていうことはなかったから、寒い時期などは薬缶にお湯を沸かして洗ったが、洗い桶一杯だから考えて上手に使わなければならなかった。また泊めるとなると、朝から仕舞ってある客蒲団を出して陽にあてたり、寝間着を用意しなければならぬし、帰った後はシーツや寝



写真6 畳を上げて、天日に干しているところ

間着の洗濯をしなければならなかった。それも洗濯機が無いときは盥^{たらひ}でございごしの手洗いだった。

といて決して嫌なことばかりではなかった。というよりむしろ、よその人と一緒に賑やかに食事をしたり、泊まり客とお喋りしたりするのは楽しいことだった。話上手なおじさんだったり、やさしいおばさんだったりすると、子どもたちも夜遅くまで、まわりにくっついて離れなかった。その代わり親戚の年寄りなどだと肩たたきや脚揉みなどをさせられたし、ときには説教されることもあったが、それはそれで納得していた。一方、よその家に泊まる場合には、自分の家とは違った文化があることを知って世間を学んだ。

用事が多かったので子どももよく手伝わされた。子守や弟妹の世話、お使い、掃除、4、5年生になれば炊事もやらされたし、襦袢^{おむつ}洗いくらいはやらされた。

こういうくらしをする中で、人は誠意を持って助け合って生きて行か

なくてはならない、自分勝手をしてはいけないということを自然と身につけていったのである。

とくに子どもにとって手伝いをすることは大きな意味を持っていた。親が喜ぶ顔を見る喜び、人の役に立つ誇らしさを知ることはどれほど心を豊かにしたことか。また弟妹の子守をすることで自分より弱い者に対する憐憫や愛といった、人間にとってもっとも大切なものを学んだのである。

人間教育だった昔のくらし

そればかりではない。手や身体、頭を使って何でもしていた昔のくらしは、観察力、注意力、仕事の段取り、知恵の働き、工夫する力、新しい物事を生み出す力を育てた。

掃除一つにしても、はたきをかける、箒で掃く、雑巾がけをするという作業がいかに複雑で学ぶことが多いか。幸田露伴が娘の文に自ら掃除指南をしたときのことを、文が「こんなこと」で書いている。



写真7 障子の張り替え。小さい子も障子をはがすのお手伝いしているところ

「道具を持ってきたさいと云われて、三本ある箒の一番いいのにはたきを添えて持って出る。見て、いやな顔をして、『これじゃあ掃除は出来ない。ま、しかたが無いから直すことからやれ』というわけで、日向水をこしらえる。夏の日にそれがぬるむまでを、はたきの改造をやらされ、材料も道具もすべて父の部屋の物を使った。……鋏を出して和紙の原稿の^{はこ}を剪る、折る……団子の串に^{やすり}鑢をかけて竹釘にする。釣^{つり}綸のきれはしらしい渋引の糸屑で締めて出来上り。さっきのはたきとは房の長さも軽さも違っている。『どうしてだか使ってみればすぐ会得する』といわれた。箒は洗って歪みを直した」

続いてはたきの掛け方、箒の使い方、雑巾がけの仕方と次々と厳しく鍛えられるのだが、これを読むと掃除というものがどれほど奥深い仕事か、あらためて気づかされる。

幸田文は父露伴の終焉について書いた一文によって一躍世に出たのだが、それまではまったく文学には関

係のない主婦であった。もちろん父譲りの文才もあったと思うが、長い間、こうした露伴仕込みの主婦業をやり続けてきたことが鋭い感受性やものを見るたしかな力を培い、それが時を得て開花したのであろう。

昔は何か習いごとをするときには前後に必ず掃除をさせたものであるが、これには大きな意味があったのである。いまの小学校では掃除さえ業者に頼むところが多いというが、それが果たして子どもにとって幸せなのだろうか。

戦後この方、われわれ日本人は、嫌なこと、面倒なことはしたくない、便利、快適、そして経済成長こそがくらしの豊かさだと信じてがむしゃらに進んできた。しかしここには大きな間違いと落とし穴があったのではないか。ここでもういちど石油エネルギー大量消費以前の、人力エネルギー時代のくらし方を見直し、それが持っていた人間教育力を考え直すことが必要ではないだろうか。

*2012年10月25日（東京）、11月26日（大阪）に開催予定の「まちなみシンポジウム」では、本稿に関連した小泉和子先生の講演があります。



小泉和子（こいずみ・かずこ）

「昭和のくらし博物館」館長。1933年東京都生まれ。女子美術大学卒業後、東京大学で工学博士の学位を取得。日本の家具史・生活史を研究。資料館の展示企画や重要文化財建造物の家具などの復元を行う。07年京都女子大学教授を退官。家具道具室内史学会会長。世界遺産石見銀山重要文化財熊谷家住宅館長。（有）小泉和子生活史研究所代表取締役。著書：『室内と家具の歴史』『箒』『昭和のくらし博物館』『船箒の研究』ほか多数。